

[http://www.engineer.or.jp/c\\_dpt/nucrad/](http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/)

## 原子力・放射線部会

# 会報

～平明～



編集: 広報幹事

akiko.nishimura.ca@hitachi.com

## 巻頭言

### 『技術士会への期待—原子力・放射線の産業利用について—』

東京大学大学院  
農学生命科学研究科教授  
中西 友子



私の技術士会との正式な出会いは、平成 17 年、日本技術士会に「原子力・放射線部会」が設立された同じ年に文部科学省科学技術・学術審議会の技術士分科会の委員になったことに始まる。それから東日本大震災の少し後まで、技術士について深く知る機会が多々あり、日本技術士会創立 60 周年の記念会では鏡割りまで経験させていただいた。周知のように、日本の技術士には多岐に渡る分野が設定されており、その資格は各分野で非常に高度な技術を持つ専門家だけに与えられる。そして技術士とは世界に通用する国家資格である。取得が非常に難しくまた現場での経験も必要なことから、優れた技術者の大きな励みになっていることは間違いないだろう。日本技術士会の原子力・放射線部会は 10 周年を迎えたとのことであるが、これからさらに原子力・放射線部会が発展し、数多くの優秀な技術士が育つことを期待しているところである。

原子力・放射線の技術士の方々は、特に福島第一原発事故以来、多方面に渡り大きな活躍をしておられるが、ただ、原子力・放射線の分野について今一

度、考えてほしいことがある。まず、その代表である原子力発電所についてであるが、第一に原発を取り巻く広範な工学的技術に関してである。原発というと、ウランの核分裂を起こす燃料格納容器周辺に興味がいきがちであるが、プラントとしてみた発電所は、結局は水を沸かし、その蒸気を使ってタービンを回して電気を作っている一種の化学プラントであり、流動、伝熱、蒸発といった化学工学の基本技術をはじめとするより広範囲の分野の技術の専門家さらなる結集が必要である。

同時に、今回の福島第一原発事故で今求められている技術には現場での化学的知見に関するものが多いように思われる。何故水素爆発をしたのか。それは燃料棒の材料であるジルカロイが水を分解して水素を発生させたためである。またチェルノブイリと比較して何故福島では放出された放射性ストロンチウムの量は放射性セシウムよりもかなり低くなったのか。それは爆発した温度に違いがあったからである。汚染水の中で最も放射能が高い核種は<sup>90</sup>Srである。ではこの汚染水に含まれる放射性核種はどのように取り除いて廃棄できるようになるのだろうか。また爆発で飛び散った放射性核種はどのように蓄積されまた動いていったのだろうか。事故から 3 年半が経過し、その間に放射性核種はどう散らばってしまったのだろうか。以上に挙げたような事柄は、放射性核種の化学的挙動の問題であり、それらを解析

する技術の基盤は化学や応用化学ということになる。

また、原子力・放射線が応用されているエネルギー以外の分野であるが、その市場規模は日本では原子力エネルギー利用分野とほぼ同じ規模であるものの、米国では約3倍と非常に大きい。つまり、工業・医療・農業などの分野で利用されている原子力・放射線分野からはとても大きな経済効果が生じているということである。最も優れた性能を持つ半導体は原子炉でシリコンを照射することにより生成させる。中性子線の照射により、シリコン中にリンを全くの偏りが無い均一な状態に生じさせることができるからである。これは他の手法では不可能である。また、標準物質の製造には物質中の元素の認証値、つまり絶対値が必要であるが、いくら機器分析技術が発達しても、物質中の元素の絶対量を測定できる方法は原子炉の利用以外にない。試料を原子炉内に入れて中性子を照射するだけで、多元素を同時に非破壊分析することができるからである。また放射線の種類によって色々な透過像を得ることができる。病院でのレントゲン線だけでなく、中性子線を利用すると非破壊状態でコンクリートの中のひび割れやエンジンの中のオイルだけの像が取得できたり、土壌中の根をそのままの状態像として得ることができるなど、夢のような技術が開発されている。

私は長年、放射線や放射性同位元素 (RI) を扱って研究を進めてきた。これらは、「放射線利用」と総称されるものの、他の手法では代替不可能な新しい研究分野を開拓する際の強力なツールである。RI を用いることにより生体や物質中の化学物質の移動をトレースすることができ、近年の急激な遺伝子工学の発展は RI の利用により始まったといっても過言ではないだろう。

以上、私が特に関係の深い原子力・放射線技術の分野について日頃感じていることの一端を述べさせていただいた。原発やその安全性の技術は勿論であるが、エネルギー以外の原子力・放射線分野も含め、技術士の方々が新しい技術革新をもたらす中核になっていただくことを期待したい。

## <プロフィール>

中西友子 (なかにしともこ) 石川県生まれ。

1978 年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了 (理学博士)。その後、日本ゼオン (株) 技術開発センター研究員、米国カリフォルニア大学バークレイ校内ローレンスバークレイ研究所博士研究員などを経て 1987 年東京大学農学部助手。助教授を経て 2001 年東京大学大学院農学生命科学研究科教授。その後、日本原子力研究所グループリーダー、放射線医学総合研究所客員研究員、東京大学総長補佐、東京大学環境安全本部・本部長などを兼務。第 20 期日本学術会議会員。農学生命科学研究科・農学部の福島被災地調査研究の纏め役。

学外委員では、文部科学省科学技術・学術審議会委員、日本ユネスコ国内委員会委員、文化審議会委員、文部科学省参与などを兼任し、現在は内閣府原子力委員会委員、日本学術会議連携会員、日本工学アカデミー副会長、日本放射化学会会長などを兼務している。

猿橋賞、原子力学会貢献賞、日本放射化学会賞、フランス国家功労勲章 (シュバリエ) を受章。放射線や放射性同位元素を用いて植物中の水や元素のリアルタイム動態の可視化研究による植物活動の解析を進めている。



## 部会長挨拶

～部会創立 10 周年

記念行事を終えて～

部会長

桑江良明



去る 2014 年 6 月 20 日、部会創立 10 周年記念行事が盛会のうちに無事終了しました。

第一部では、文部科学省・松尾課長、日本技術士会・高木専務理事、九州大学・工藤名誉教授の各氏より、それぞれのお立場からの心温まるご祝辞、示唆に富んだ激励のお言葉を賜りました。また、林相談役（前・部会長）からは、部会設立準備段階から現在に至るまでの部会活動を振り返り、その時々のお思いやご苦労などを交えたご講演を頂きました。

第二部では東京大学・班目名誉教授（元・原子力安全委員会委員長）より、「今後の原子力の進め方と技術士の役割」と題した特別講演を頂きました。講演は 6 年前（2008 年 9 月）にやはり技術士に向けて行われた講演の内容を、3.11 事故を経験した現時点で振り返りながら、一つひとつ確認する形で進められ、本質的には今も技術士に求められることは変わらず、むしろ 3.11 事故の後、原子力に対する信頼が失墜した今こそ技術士活用の必要性が高まっているとするものでした。講演を聞いた多くの部会員が心強く思うとともに、大きな期待に身が引き締まる思いを持ったことでしょう（記念行事の内容は部会 HP に掲載されていますので、詳細はそちらを参照ください）。

当日、記念行事に先立って開催された第 10 回全体会議では、「過去 10 年を振り返っての今後 10 年の活動方針」が承認されました。また、全体会議、記念行事に参加された方全員に刷り上がったばかりの

「創立 10 周年記念誌」が配布されました。これら一連の諸活動（「第 10 回全体会議」・「10 周年記念行事」の開催、「今後 10 年の活動方針」・「10 周年記念誌」

の取り纏め、発行）を「部会創立 10 周年を迎えるにあたっての関連活動」と位置付け、昨年秋頃から本格的に議論を重ね準備を進めてきました。これらの活動の一つひとつが、当初期待した通りの、あるいはそれを上回る結果、仕上がりだったと思います。当日長時間に亘り参加された部会員の皆様、並びに、企画から当日対応まで担当された幹事の皆様には改めて心より感謝申し上げます。

さて、これら当面の“イベント”としての諸活動がとりあえず成功裡に終わった訳ですが、それは、あくまでも「10 周年を迎えるにあたっての活動」であり、今後 10 年に向けてのスタートラインに立ったに過ぎません。ここで得た“手応え”を今後の具体的な活動に繋げていく必要があります。

では、10 年前と今とでは何が違うのでしょうか。それはこの 10 年間で得られた部会としての経験（活動実績）だと思います。これまでの活動の中には、うまくいったものもあれば、途中で挫折したものもあります。しかし、それら全てを含めた経験が今後の活動を正しい方向に導き、困難を乗り越えるための力となります。10 年前に文字通り部会がスタートした時には、各部会員の心のどこかに「(学会、産業界など) 誰かが引っ張ってくれるはず」と思っていたのではないのでしょうか。新たに資格ができたのですからそのような期待を抱くのも無理からぬことかもしれません。しかし、今は違います。「自分たちで切り開くしかない」とははっきりと自覚しました。全体会議で承認された「今後 10 年に向けての活動方針」の前半は、過去 10 年の客観的な振り返りと自己評価であり、後半はタイトル通り今後に向けての活動方針です。ここに至った議論を私なりに一言でまとめるならば「今一度、自分（たち）自身の足元を固める活動を着実にやろう」ということになります。ぜひ、皆さん一人一人がこの「活動方針」を改めて読んでみてください。限られた人数と限られた時間での検討であったため、まだまだ不十分な部分があると思います。記念行事での冒頭挨拶で申し上げた通り、この「活動方針」は作って終わりというもの



ではなく、いろいろな場で、これを素材として継続的に議論していきたいと思っています。

10 周年記念行事での来賓挨拶や講演を聞いて、私たちに対しては 10 年前以上に切実な期待が寄せられていると感じました。以下にそのような来賓諸氏の言葉を拾ってみます。

「現在、原子力関係者は社会からの信頼を失っているが、それを回復する基盤と活力を持っているのは技術士・技術士会である。ぜひそれらを使って行ってほしい」、「技術士会には、色々な階層、立場の人が集まっている。必要な全ての階層、機関の人が集まっているのは技術士会だけであり、一人一人の思いを吸い上げて、国民の信頼に訴えてほしい」、「技術士諸兄の意識以上に、世の中は技術士を信頼していると感じる。他部門の技術士との情報交換も活発にして、それを踏まえて社会に情報発信して行ってほしい」、「技術士会は、中立組織として社会に認知させるべきである。技術士諸兄が自分で思っているよりは既に認知されているとも思う。」

このような大きな期待と心強い励ましの言葉を糧にして、今後 10 年に向けた第一歩を力強く踏み出しましょう！

## 理事会での話題から

日本技術士会 理事  
倫理委員長、部会相談役  
林 克己



前号の部会報第 14 号は、創立 10 周年記念誌でしたので、「理事会での話題から」を書くのは久しぶりになります。

今回は技術士試験関係のお話です。

技術士第一次試験合格者は全部門合計で平成 24 年度の 10,881 人から平成 25 年度は 5,547 人と半減し、これは主に適性科目による影響でした。原子力・

放射線部門も 126 人から 86 人と 3 割減っていますが、これは適性科目よりも受験者数減少が主に影響しています。平成 26 年度の原子力・放射線部門の受験者数は平成 25 年度よりさらに 2 割減少しているのが心配です。

技術士第二次試験合格者は全部門合計で平成 24 年度の 3,409 人から平成 25 年度は 3,801 人と増加しました。この理由は受験者数減少を上回る合格率上昇の影響でした。原子力・放射線部門も同様の理由で 19 人から 21 人へと微増しました。しかし平成 26 年度の原子力・放射線部門の受験者数と筆記合格者数は平成 25 年度よりさらに 2 割減少しており心配です。

この 10 年の傾向をざっと見ると、全部門の合格者数は、第一次試験は漸減、第二次試験は増減繰返しから漸減に変わっています。しかし、こと原子力・放射線部門に関しては創立 10 周年記念誌の資料編 3 にもデータが掲載されているとおおり、長期低落傾向が止まっています。特に、申込者が少ない選択科目については整理すべきという意見が毎年理事会の恒例の話題となっており、部会でも、残すべき選択科目については受験者増加の手を打っていくことが必要です。

また全体の受験申込者数の減少予測を行ったところ、日本技術士会の試験・登録業務に係る大幅な経費削減が必須となることがわかり、理事会では試験センターを現在の神谷町から渋谷に移すことを決定しました。移動は来年の予定ですが、移動後大きな不便を感じられることが無いよう事務局が工夫と努力をしていただけたと思います。

最後になりましたが、資格保持者が増えるには国民の役にたつ仕組み、つまり所属組織の役にたつ明示的な仕組みが必要です。部会としても小さな仕組みの実績と成功例の積み上げの努力を続けていただきたいと思います。同時に受験者を直接増やす努力もよろしくおねがいたします。

## 第 10 回全体会議 実施報告

日本技術士会原子力・放射線部会の第 10 回全体会議（平成 26 年度）が 2014 年 6 月 20 日（金）に神谷町にある葺手第二ビル 5 階会議室で開催されました。「過去 10 年を振り返っての今後 10 年の活動方針について（案）」、平成 25 年度事業報告、平成 25 年度事業計画、平成 25 年度収支決算報告、平成 26 年度予算計画が諮られ、全会一致で承認されました。



## 10 周年記念行事・特別講演会

原子力・放射線部会は設立 10 周年目を迎えました。これを記念して、第 10 回全体会議に続いて 10 周年記念行事が開催されました。

10 周年記念行事の第一部では、桑江部会長からの挨拶の後に、文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課松尾泰樹課長、日本技術士会の高木譲一専務理事、九州大学東アジア環境研究機構の工藤和彦特任教授の 3 名の来賓の方より祝辞が述べられ、林前部会長からは「部会 10 年のあゆみ」が紹介されました。

第二部の特別講演では、東京大学名誉教授（元原子力安全委員会委員長）の班目春樹氏より、「今後の原子力利用の進め方と技術士の役割」と題したご講演を頂きました。講演の中では班目先生より、「福島第一原子力発電所の事故を経て原子力利用への国民の目は厳しい。関係者が自らの狭い知識から安全性を過信し、十分な対策をとらなかったことが事故拡大を招いた。関係者の一層の研鑽が求められている。技術士制度が社会に認知され、民間での自主的活用が進み、規制側がそれを活用できる環境を整えるべきである。ここまでやれば事故は防げたというところまで掘り下げないと信頼は得られない。これを技

術士会がやってほしい。技術士会は中立組織として社会に認知させるべきであるが、技術士資格だけでは不十分であり、目的に応じた上位資格を設けてほしい。」と述べられました。

## 柏崎・刈羽原子力発電所見学会

2014 年 5 月 23 日、原子力・放射線部会主催の柏崎・刈羽原子力発電所見学会に 9 部門（原子力・放射線、応用理学、衛生工学、建設、上下水、電気電子、情報工学、化学、機械）から 23 名の技術士が参加しました。

一行は JR 柏崎駅に集合して大型バスで発電所に向かい、サービスホールにて東電柏崎刈羽原子力発電所・林副所長より概要説明を受けた後、発電所構内の見学箇所をバスで回りました。柏崎刈羽原子力発電所は、柏崎市（1～4 号機）と刈羽村（5～7 号機）にまたがり、2～4 号機は中越沖地震以来停止し、2012 年 3 月に 6 号機が停止以来、全基が運転を停止しているとの説明を受け、中越沖地震と東北地方太平洋沖地震を踏まえて、深層防護の各層・各機能の対応能力の向上、恒設及び可搬式設備の組合せを安全強化策の基本方針としている旨の紹介がありました。また、一行は、電源・注水設備の配備状況、免震重要棟、防潮堤、貯水池等を回り、安全強化策の実施状況を見学してサービスホールに戻り、林副所長との活発な質疑応答を行いました。



## 2014 年度上期の活動実績

### 1. 全体会議

- ・第 10 回全体会議 (2014 年 6 月 20 日 (金))

### 2. 役員会

- ・平成 26 年度 第 1 回役員会 (2014 年 4 月 18 日 (金))
- ・平成 26 年度 第 2 回役員会 (2014 年 6 月 20 日 (金))
- ・平成 26 年度 第 3 回役員会 (2014 年 7 月 25 日 (金))
- ・平成 26 年度 第 4 回役員会 (2014 年 9 月 19 日 (金))

### 3. 継続技術研鑽

#### 1) 講演会

- ・10 周年記念行事特別講演会

日時：2014 年 6 月 20 日 (金) 15:00～17:30

講演「今後の原子力利用の進め方と技術士の役割」

講師：班目春樹氏 (東京大学名誉教授、元原子力安全委員会委員長)

#### 2) 技術士の夕べ (例会)

- ・第 40 回 技術士の夕べ

日時：2014 年 7 月 25 日 (金) 18:00～20:00

講演：「放射線出前授業から考えるリスクコミュニケーション」

講師：秋津裕氏 (京都大学大学院エネルギー科学研究科)

- ・第 41 回 技術士の夕べ

日時：2014 年 9 月 19 日 (金) 18:00～20:00

講演：「高レベル放射性廃棄物 (HLW) の地層処分事業について考える」

講師：安保秀範氏、井上むつ美氏 (原子力発電環境整備機構 (NUMO))

#### 3) 見学会

- ・東京電力株式会社柏崎刈羽原子力発電所見学会

日時：2014 年 5 月 23 日 (金) 13:00～16:00

場所：東京電力株式会社柏崎刈羽原子力発電所

参加者：9 部門 (原子力・放射線、応用理学、衛生工学、建設、上下水、電気電子、情報工学、化学、機械) の技術士 23 名

#### 4) 合格祝賀会

- ・原子力・放射線部会「平成 25 年度新技術士講習会」

日時：2014 年 4 月 18 日 (金) 13:00～16:00

場所：日本技術士会 葺手第二ビル 5 階会議室 A

- ・日本技術士会主催「平成 25 年度技術士第二次試験合格者研修会・祝賀会」

日時：2014 年 4 月 19 日 (土) 15:00～18:30

場所：日本技術士会 葺手第二ビル 5 階会議室 A 及び田中山ビル 9 階

### 5) その他の講演

- ・(公社) 日本技術士会登録グループ 技術者倫理研究会 第 53 回例会

日時：2014 年 7 月 29 日 (火) 18:30～20:30

講演：「原子力・放射線部会 10 年の活動を振り返って」

講師：桑江良明氏 (原子力・放射線部会部会長)

- ・電事連安全文化ステアリングチーム会合

日時：2014 年 9 月 12 日 (金) 16:00～17:00

講演：「技術士制度概要と技術士原子力・放射線部会の活動」

講師：桑江良明氏 (原子力・放射線部会部会長)

### 4. 復興支援活動関連

#### 1) 福島復興支援活動

- ・2014 年 6 月 21 日 (土) (於：東京)

平成 26 年度 第 1 回福島ふるさと交流会・相談会

- ・2014 年 8 月 24 日 (於：東京)

平成 26 年度 第 2 回福島ふるさと交流会

- ・2014 年 11 月 15 日 (土) (於：東京)

平成 26 年度 第 3 回福島ふるさと交流会

#### 2) その他の支援活動

- ・2014 年 7 月 18 日 (金) ～7 月 19 日 (土)

石巻市復興支援の現状視察と大船渡市碁石地区復興支援活動

### 5. 広報活動

#### 1) 原子力・放射線部会 HIP リニューアル

(2014 年 9 月)

[http://www.engineer.or.jp/c\\_dpt/nucrad/](http://www.engineer.or.jp/c_dpt/nucrad/)

#### 2) 原子力・放射線部会「創立 10 周年記念誌」

(部会報第 14 号) 発行 (平成 26 年 6 月)



## 部会HPリニューアル

### 1) 部会HPリニューアルのお知らせ

原子力・放射線部会のHPがリニューアルされたことはお気づきのことと思います。旧HPのトップページに相当する「トピックス」とともに、新HPでは、移設時の情報発信の要として「福島復興支援活動関連」、「10周年記念行事関連」、「技術士を目指す人のために」のバナーを設置しました。さらに、「部会活動協力のお願い」と部会MLを連携した情報発信を行うとともに、「問い合わせフォーム」やGmailを活用した情報収集を併用して、双方向のコミュニケーションツールとして整備しました。今後も外部の動向に気を配りつつ、HPを活用した迅速な情報発信に努めていきます。皆様も定期的な閲覧をよろしくお願ひします。

### 2) 部会HP移設完了までの経緯

日本技術士会HPの共通フォーマットは、HPを一括管理する事務局の負担軽減と更新の迅速性を目指して2011年に導入されましたが、HPの移設は膨大な作業となるため導入はなかなか進まず、2013年初めで移設が実施されたのは全体の約1/4でした。

一方、当部会では、発足5年目頃から2名で管理しており、特に、東日本大震災後は年に数回の更新がやっとでした。状況を打開するためには、新システムの導入と管理体制の見直しが必須と判断し、2013年初めに新HPへの移設作業計画の検討を開始しました。新HP検討の課題は2点、複数人で管理する体制を構築すること、セキュリティと迅速な承認手順を両立することです。検討の結果、「部会活動は成果の公開迄が一気通貫」の方針の下に、班の所掌に合わせて頁管理を割り振り、各班に「HP担当者」を置くこととしました。更新作業の大半は簡易に実施できるようにし、大がかりな変更や公開に配慮が必要な事項は、部会長判断か事前に役員会で審議するという方針も決めました。

これらの検討を2013年7月に完了し、約5か月の

整備作業を経て、2013年11月末には新HPに暫定移行しました。また、翌年3月にHP担当者教育も実施し、前述のとおり、2014年9月に漸く全ての作業が終了しました。

<懐かしい旧HPのトップ画面(～2014年9月)>



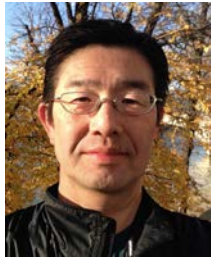
<新HPのトップ画面(2014年9月～)>



## 新幹事紹介

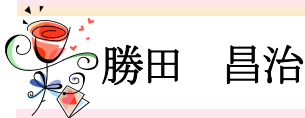


雨夜 隆之



はじめまして、平成25年度合格者の雨夜(あまや)と申します。よろしくお願ひ申し上げます。私は当部門の新しい活動領域とされた原子力安全文化・核セキュリティ文化の醸成活動に

微力ですが貢献したいと思っております。勤務先は原子力規制庁で、原子力施設の核物質防護の検査官であると同時に、国内外の核セキュリティ文化の醸成活動をしています。例えば、こちら <http://youtu.be/mgVlqWbFG9Q> はその活動の一部で、本年9月23日のIAEA総会サイドイベントで紹介されます。これらの文化は原子力関係者全員が意識し、維持・向上しなければならぬものであり、その方法を皆様と一緒に考えていきたいと思ひます。



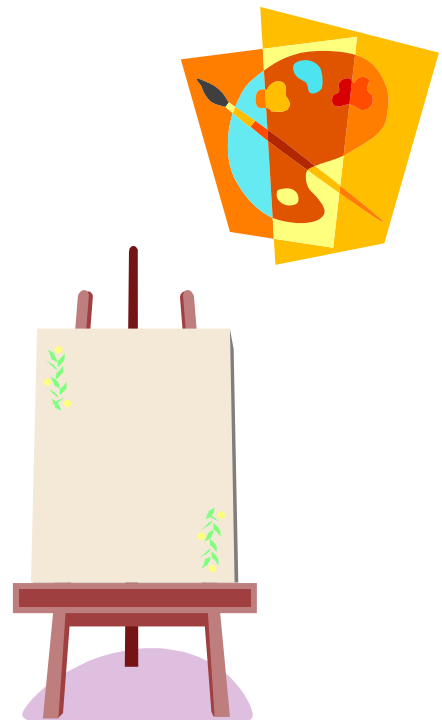
勝田 昌治



一人のエンジニアとしてどのような視点で業務を遂行していけば良いかを考えていた時、ある記事が目にとまりました。「技術士とは？なぜ今「原子力・放射線部門」なのか？」と

題した記事でした。義務・責務を負う技術士が得られる権利は名称独占のみで、その是非は資格取得を目指す者、取得した者の価値観次第であるとの主旨に感銘を受けました。それから5年ほど、部会主催の講演会

や検討会への参加、原子力関連誌への投稿、資格の講習や設問の解説のお手伝いなど、個人でできる範囲で活動してきましたが、忙しい日常を言い訳に参加率が頭打ちとなり少し悩んでいました。年度の初め、社内の資格取得推進で同記事に再び触れ、当時の動機を今一度思い起こし、一步踏み込んだ活動をしたいと考えていたところ、あるイベントで今回のお話を伺い、務まるかどうかの心配はよそにまずは動機優先でその意志をお伝えし、平成26年度の幹事を務めさせて頂くことになりました。技術士を目指す動機となった記事の著者、桑江部会長のもとでお役に立つことができれば一層光栄で、積極的に参画していきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。





## 新入会員の声



### 大西 祥作



2011. 3. 11 に福島原子力事故がおこりました。それまで私は、原子力プラントの一次系装置類に関する設計に従事しながら、原子力プラントの概要を業務の中で把握

理解していたつもりでしたが、何も原子力を知らないことに気が付きました。原子力安全を少しでも理解し、原子力安全に少しでも寄与出来るようにするにはと考えた結果、50 代中ではありますが、原子力・放射線部門の技術士にチャレンジすることにしました。そして、3 度目のチャレンジで何とか合格証を手にすることが出来ました。部会諸先輩方々のようには行きませんが、原子力・放射線部門の受験動機を時々思い起こし、業務に少しでも反映出来たらいいなと思うこの頃です。



### 佐久間 啓臣



このたび部会に新しく入会いたしました佐久間です。

二十数年前に重工メーカーに入社以来、原子力発電所用ポンプ設計業務一筋できました。原子力発電所にある重要度の高い大型

ポンプを主に担当してきました。原子力発電所用ポンプの重要性をよく理解しているつもりでしたが、2011 年に発生した大震災、全電源喪失時の冷却装置、なかでもポンプの動的機能維持の必要性を痛感しま

した。大学・大学院時代に原子力工学を専攻したものとして何かできることはないか、と自問し、原子力・放射線部門の技術士になることを決意しました。勤務先は関西であり、なかなか関東の会への参加は難しいですが、今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

技術士 (原子力・放射線、機械部門)、PE (Washington State)



### 千歳 範壽



おかげさまで、この春、放射線利用の選択で合格することができました。受験の直接のきっかけはあまり自慢できるようなものではなく、環境計量士の講習会で技術士取得を勧められたことでした。しかし、

その後、東日本大震災があり、放射能測定やがれき処理に必要な技術者が足りないという話を耳にして、環境測定や放射線に関して得た知識で何かしら役に立つことがあるのではないかと考えるようになりました。本業や家庭の事情もあり、すぐに有言実行は難しいのですが、先輩方から教わりながら、放射線に対する理解を広め、放射線利用技術を社会に役立てるために少しでも貢献したいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。





## 神谷 永世



私は、原子力施設や加速器施設の放射線モニタリングシステムのエンジニアリング業務を担当しています。技術士の勉強期間中にあった福島事故は、自らの業務の重要性を私に認識させ、技術士受験のモチベーションに繋がりました。抱負として、「福島復興」を抜きにはできません。現在の業務でも係わりはありますが、もっと深く関わっていくために、私に何ができるのか、何をすべきかについて思案中です。原子力放射線については、一般の方との間に大きな認識のギャップがあります。技術士として、「継続研鑽」はもとより、このギャップを埋めていくために、「公衆の利益の優先」への理解も深め、今後について考えていきたいと思えます。

## 編集後記

原子力発電所の安全設計に携わりたいと入社し、その後「技術士」を取得して早や3年、あっという間に月日が経過しました。入社した年に設立された「原子力・放射線部門」には某かの親近感を覚えません。当時は、部会報の編集に携わるなんて夢にも思いませんでしたが、創立10周年記念誌(会報14号)に続き今回も編集を担当させて頂きました。前号(会報14号)では、先輩方が築き上げてきた部会10年の歩みを紐解きながら、改めて先輩方の凄さを感じました。また、今回の会報編集については、広報活動にとって肝となる「タイムリーさ」が欠けてしまいましたが、何とか発行にこぎつけることができました。この場をかりて早々に原稿を執筆いただいた皆様へ御礼申し上げます。

また、表紙にある「平明」は、「わかりやすくはつきりしているさま。夜明け。」の意味です。広報活動は、簡潔明瞭を心がけ、リニューアルした部会のホームページ通じて部会あるいは個々人の活動及び成果をタイムリーに効果的に配信していくことが肝要と感じます。これらの小さな積み重ねのひとつひとつが種と化し、やがて根を張り実を結ぶ(夜明けを迎える)と信じています。

(おわり)

